ゆめにしき

いろはに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゆめにしき

【Ｎコード】
Ｎ０２５４Ｔ

【作者名】
いろはに

【あらすじ】
幕末にトリップしてしまった少女と
新撰組のお話。
しかしそこは本来の幕末ではなかった。

第一話

吹き抜けるような風と、
形を変えていく雲が、
なんだか好きだ。

放課後の学校の屋上で、寝そべって空を見つめていた。
果てしない、どこまでも続く青い空。
空に浮かぶ白い雲だって、手を伸ばせば届きそうな。
そんな錯覚に陥る。
葵は、暖かい空気に身を任せてゆっくりと夢の中へと堕ちていく。

「…おい」

つんつんと頬をつつく感触がする。
目を覚ました彼女がゆっくり起き上がると同時に彼女の髪を揺らして絡みついて視界遮った。手でそれを抑えて顔を上げるとそこには見知った顔が。

「…やっと起きたな、この野郎」
「透？」
「葵、いま何時だと思う？」
「…まだ一時貫目も始まってないだろうから…九時前？」
「残念、ただいま午後二時」
「は？」

いや、本当にさっきまで九時前だったはずなのに。
そんな訳がない、と彼女は少年に言った。寝転がって空を眺めて、重くなった瞼を下ろして少しだけ寝ようと思った…だけだったはず。考えてみるとやはり寝てしまったのだろうか、と思った。これでは授業を受けるのは恥ずかしいと思いため息をつく彼女。

「…もう帰ろう。今日は誰かさんのせいで授業を受ける気がしない」
そう言ってそっぽを向いて立ち上がる少年に彼女は彼の裾を掴んだ。彼は掴んだ彼女の手を見つめて、何だ、と言うような視線を浴びせる。

「透はちゃんと授業受けないと…」
「…あんたがいなきゃつまらない」

小さく呟いた彼の言葉は彼女には届かず彼女は首を傾げる。

「何？」
「…なんでもねぇよ」

何故か怒りながら去る彼の後ろ姿を見つめて彼女は小さく笑って立ち上がる。

「ありがとう」
「…別にお礼なんて言われることとしてない」
「もう、素直じゃないんだから」

＊＊＊

並んで歩く帰り道、まだ時間が早いからか学生の姿は少ない。

（サボってきちゃったな…。）

改めて罪悪感を感じた葵は、ちらっと学校を振り返る。隣の透はと言えば、全く気にしていない様子で欠伸を一つしただけだ。

「…全く、そんなに気にするんだったら最初から寝るなよ。」

「別に、サボるつもりで寝たわけじゃ…。」

「でも、現にそうなってるだろ。」

透の言葉は最も過ぎて、何も言い返せなかった。

（普段は逆なのに…。）

先生に頼まれては、屋上で授業をサボる透を連れ戻す葵。

ただの幼なじみの筈なのに、まるで透のお守り係のような扱いの葵。

とはいえ、そのかわり二人の関係について変な噂も立たないので、結局は先生達に言われるがままに動くようにしている。その上、葵の名前が1つ年下の透のクラスメート達にも覚えられるようになってしまい、『七瀬先輩』として、今ではその後輩達とも仲良しだ。

「あれ？二人とも今日は5時間授業だったっけ？」

不意に考え込んでいた葵の背後から声がした。

「ぁ、遼。」

透の兄である設楽　遼だ。
透があからさまに嫌そうに眉を潜める。

「えっと……。」

葵は事情を説明しようとしたが、やはり寝過ごしたとは恥ずかしくて言えない。あぁとかえぇとか、適当に言葉を繰り返していると、見かねた遼が爽やかな笑顔を二人に向けた。

「まさかとは思うけど、サボりじゃないよね？」
「…あぁ、サボりだ。」
「ちょっ…。透！」

葵は冷や汗をだらだら流しながら、即答した透を睨んだ。

「今更隠してもしょうがないだろ。だいたいお前が寝過ごしたから…。」
「寝過ごしたの？体調悪いとか？」
「いや、えっと。」
「もしかして、透が何かした？大丈夫だよ、僕が後で叱っておくから。」

そう言って笑う遼の目は笑っていない。

（…笑顔が怖いよ。遼。）

葵も思わずひきつった笑みを浮かべた。

「ばっ…誰が葵なんかにっ。」
「透は黙ってて。」
相も変わらぬ爽やか笑顔で透を黙らせ、心配げに葵の顔を覗き込む遼を前に、さすがの葵もギブアップして白状することにした。
「…ごめんなさい、屋上の空気が気持ちよくて寝過ごしまして、今更授業受けるのも恥ずかしくて、帰って来ました。」
「本当に？」
「うん。心配かけてごめん。」
遼はただ一息ついて、葵の頭をくしゃくしゃ撫でた。子供扱いをされているみたいで正直、恥ずかしい。
「葵が何でもないなら、良いよ。」
ふわりと笑う遼の顔は陽に照らされて、ただてさえ目立つ整った顔が余計に綺麗に見えた。遼の金の髪が風に揺れる。
「兄貴は葵に甘すぎ。」
「そうかな。透がキツイだけなんじゃない？」
「そうそう。」
「調子にのるな。」
「あたっ……。」
透に軽く頭を叩かれた。大袈裟に痛がると心底冷めた視線で透が葵を見てきたので、大人しく止めた。
「遼は大学の帰り？」
「うん。まぁね。……透？」

いつのまにやら透が、二人より少し離れた場所に立っていた。慌てて、葵は来た道を戻る。

「どうかした？」

「…なんか、変じゃないか？」

透の視線を追っていくと、ゆったりと流れている川の流れに逆らうように渦巻いている場所があった。

「まさか。」

「…かもしれないな。」

「二人とも怖い顔してどうしたの？」

遼は二人の顔を見比べ、それから視線をずらして漸く状況を理解した。

「やめておきなよ。二人まで溺れ死んだら洒落にならない。今から電話して…。」

「間に合わなかったら大変じゃない。」

「だな。行くぞ、葵。」

遼の忠告も聞かず、二人は川辺へ降りていく。しょうがないね、とほくそ笑みながら雅徳も二人の後に続いた。

川は意外と深くて、ズブズブ入って行くと葵は時々転けそうになる。あんたは来るな、と言われたが、頑として葵は譲らず透の後ろをついていった。勿論、そんな葵の為に後ろには遼が控えている。

（……もう少し。）

透が渦巻く川の中心に手を伸ばした時、激しくその腕が引かれ、バランスを崩した足が川の流れに呑まれた。

「……透っ！？」

「…待って、僕が行ってくるから。」

そう言ったものの、今度は川へ潜り込んだ遼すら上がって来ない。

（何か…おかしい。）

急に独りになった不安をかき消すように慌てて葵も足を進めたが、二人が何処へ行ったのかわからない。

やがて葵は覚悟を決めて、渦巻く流れに自ら身を投じた。

葵の記憶は、そこでプッツリと途切れた。

第二話

「星が綺麗ですね」

――青年がぽつりと呟く。

その言葉はただ虚しく響いた。
空の星がきらりと瞬く。
その青年の周りではいくつもの死体が転がっていた。
赤い、赤い血が青年の頬や体について赤黒く変化していっている。
青年の長い髪が風でひらりと揺れた。

「今日は早く帰れると思ったのですが…」

そう言い終わった途端、一斉に数人の人影が飛び出してきた。
それは人の形をしておらず、鋭い牙を青年に振りかざす。
次の瞬間、青年は、その影を真っ二つに斬る。
面倒くさい、と心の中で悪態をつきながら刀を振るう。
夜空に白銀の閃光が煌めいた。
斬っても斬っても数多くくる奴らに青年もため息をつく。
最近になって増えてきた。
怨霊と呼ばれるそれは、人を襲い死人を蘇えらせるという。

「（裏に誰かがいるのでしょうか、もしくは…）」
「沖田さん…？」
「あぁすみません。もう帰りましょう」

刀を鞘にしまってその場を後にする。
満月が輝く夜。
何かがすでに動き出していた。

「あーっ！何だか面白くなりそうだ」

月を背に屋根の上に立っている彼は、にっこりと笑いながら、颯爽と歩く沖田の後ろ姿を見つめていた。彼は腰に刀を差し、それを片手で握りしめてただその姿を見つめていた。

「おい、てめぇ何考えてる」
「あははっ！中村君さ…そんな怖い顔で僕を見ないでよ、皺が増えちゃうよ？
ん～…何考えてるかぁ。じゃあね…最近、何かおかしくない？…まぁ中村君の頭じゃわからないか」
「…河上、斬られてぇか」
「やだなぁ～、僕は冗談で言ったのに」

下を見下ろせば、いくつもの死体が転がっているというのに彼は気にしていないのだろうか。
先程までしん、と静まり返った場所に場違いな笑い声が響く。
河上の少し長い髪が月の光にきらめいて、風に揺れた。

「…俺は帰るぜ、ったく付き合っていられねぇな」

中村が軽く跳躍してすとん、と地面に着地した。
そしてそのまま歩き出して振り返ることもせず中村は姿を消した。

「…やっぱり面白くなりそうだ」

この予兆を察知したのかにんまりと唇が弧を描く。
空を見上げると無数の星が夜空にひしめきあっている。
不気味に静まり返った京の街を、金色の光を帯びた満月が照らす。
美しいはずのその景色に何故だか恐怖を感じ、寒気立つ。
――…いつからだろう。

月の存在をこんなにも意識するようになったのは。
あまりに月に見入っていた為か、偶々通りかかった山南が立川に声をかけた。

「立川君」
「どうかしたのかい？」
「いえ……。」

立川は罰が悪そうに瞳を伏せた。

「そう？なら良いんだけどね。」

山南は優しげな口調でそう言って、月を見上げた。
再び立川も視線を月へ向ける。
風が、二人のほほを心地よく撫でた。

「月が綺麗だ。」
「――…えぇ。」

「だけど、最近私には月が泣いているように見えるんだ。」
「泣いている、ですか？」
「あぁ。」

山南は月を瞳に映したまま、声を落として呟いた。
ただ美しいというにはあまりに不気味な闇夜に浮き彫りにされた月。

「そうかもしれません。」

そう同意した後の沈黙の中で、ただ二人は満月を見ていた。

「遅いですね、沖田さん。」

沈黙を破って話を切り出したのは、立川だった。

「そうだね。またあれが出ているのかもしれない。」

山南は目を細めて、月を睨む。
『あれ』という指示代名詞が指すものが何か、立川にもすぐに分かった。

「そうですか…」
「満月の夜に彼らの姿は映えるだろう。」

立川にとっては笑えない冗談だった。
思わず返事に詰まり、黙り込んでしまう。

「すまない、口が滑ってしまったね。」

「いえ…すみません。私もそうは思うのですが。」

「君は真面目だね。良いよ、気にしないでくれ。」
ふっと微笑み、視線を水面に浮かぶ月に反らした山南。
立川もつられて池を見た。

「まるで彼らのようだとは思わないか？」
「はい？」
「水面に浮かぶ月の如く、彼らは私達の前に現れては消える。儚くも怖れられるその存在は、決して実像ではない。」

山南は淡々とした口調で語る。
立川はさすがは山南さんだと、関心しながらその言葉を聞いていた。
1年ほど前から現れ始めた人ならざる者。
時には命すら奪う彼らを退治することもまた、新選組としての大事な任務の1つ。
死と隣り合わせの日々が続いていた。

「とはいえ、彼らの事ばかり考えていても仕方ないんだかね。」

山南はため息混じりにそう言った。
本当は、気になって仕方がない。
それは立川も同じだった。
――…何故現れはじめたのか。
再び訪れた沈黙の中で、二人は同じ問いを胸の内に繰り返す。

第三話

空を見た。
それは真っ白な空だった。
だけどそれは一瞬。
次の瞬間に、視界は変わる。

「あ、れ…？」

その空は、いつもと同じような空なはずなのにどこかが違うような気がした。
目に見える景色は、どこか知っているようで知らない場所。
肌寒い風が私の髪をなびかせる。

「っ…！」

江戸時代の模型なら何度も見ていた。教科書でも。
しかし目の前にあるのは現実にある景色。あの、江戸時代の街並みにそっくりだなのだ。

「冗談じゃない…」

知らない土地が、そこにはあった。
周りにあの２人の姿もなく、たった一人で座り込んでいた。
月の光が、地上を照らす。

一人は心細くて、寂しくて。辛くて

「あ……っ」

溢れる涙を止める術を知らない彼女はただ泣いていた。
呼吸が上手くできなくて、息が詰まる。
今までの日常は、いったいどこにいってしまったのだろうか。
泣きじゃくる彼女に、突然優しい声がかかった。

「…何、してるんですか？」
「え…？」

見覚えのある羽織りを身に纏い、腰に刀を差している彼。
心配そうにこちらを見つめて、私を眺めていた。
後ろには数人の人影。

「女性が不埒にこんな夜中に家から出てはいけませんよ」
「だ、れ…？」
「僕は沖田総司、と言います。あなたは？」
「…な、…七瀬葵…」

やっとのことで紡いだ言葉。

「七瀬さん…ですね？」

彼女の言葉を繰り返すように言った。
そしてにっこりと笑みを浮かべて、そうですか、とつぶやく彼。
長い髪が風でさらさらと揺れては、風がゆっくりと頬を掠めていく。

――知っていた。
この人の未来を、どういう人物かを。
一瞬にして脳裏に浮かぶ、誠の文字。
武士よりも武士らしく生きた者達。
言いたいことをぐっとこらえて彼に質問する。

「ここはどこ、ですか…？」
「京ですよ」
「いまはいつ…ですか？」
「確か…文久3年…かな？…それがどうかしましたか？」

これが夢なら、なんて酷い夢だろう。

「う、そ…」

わかっていても、認めたくない現実は変わることはない。
厳しい現実から目を逸らすのは、人間の性だ。
そんな訳ないと思っていたのに。
彼は私の希望を打ち砕く。
いまさっきまで学校で
冷や汗がすっと背中を流れた。
物事の流れが頭がついていかない。
彼はわからないと言った表情でこちらを見つめている。
この時代には家族も、ましては友達もいない。
深呼吸をして、冷静になろう。
自分にそう言い聞かせて落ち着かせる。

長い沈黙の後、彼が口を開いた。

「…仕方ありませんね、今日は屯所に来てください。夜に女性が一人で出歩くのは危ないですからね」

またにっこり笑って彼は私に手を差し伸べた。

「ありがとう、ございます…沖田さん」

＊＊＊

彼女は月明かりの中で、一人佇んでいた。
今にも泣きそうな瞳で、震える声で、何かを訴えるように僕に問う。
僕はただ彼女の手を引いて歩き出した。
その手はとても冷えていた。
いったいいつから、彼女はあそこにいたのか。
不思議と彼女のことが知りたくなった。
ただそれだけの好奇心で彼女の手をひいた。

突然、葵の頭に響いた苦しそうな哀しい叫び。
悲鳴に似た、声と呼ぶには程遠い微かな風に運ばれた音。

葵は神経を研ぎ澄ませて、静かな京の空気を肺に送る。
「――…七瀬さん。」
沖田はふいに立ち止まった葵を不審に思い、呼びかける。
しかし、返事はない。
慌てて駆け寄り、葵の腕を引いた。
「――…っ！？」
葵はハッとして我に返り、沖田を見上げる。
「どうかしましたか？」
「いえ…なんでもないです。」
どっと冷や汗が吹き出して顔が青い葵を見、沖田は眉を潜めた。
「無理はいけません。何かあったのでしょう？そんなに青い顔して、何でもない…なんて信じられませんよ。」
沖田はなるべく優しい口調で葵に諭すように話し、淡く微笑みを浮かべた。
そんな沖田を見て安心したのか、葵は振り返り、ある一点を指差した。
暗がりの中、月明かりだけが照らす町角。
ごくありふれたただの民家を、葵の指が指していた。
「あの家が何か？」
「違うんです。あの辺りから…微かな……声が聞こえて。」

「声？」

葵は縦に頷く。

（僕は、何も聞こえなかった。）

沖田は葵の指す場所と葵を見比べる。
何も変わりはない……はずだった。
刹那、感じたあの感覚。

（――…くる。）

沖田は自分の後ろに葵を回してから、静かに抜刀した。
沖田の目配せで、周りにいた慌てて隊士もそれに習う。
案の定、直ぐにソレは現れた。
人ならざるモノ…異形。またの名を喰鬼。

「今日は良く現れますね。」

沖田に向かってくるソレらを余裕な素振りで剣を振りかざし、次々と斬っていく。
斬る度に、人を斬る時とは違う馴れない感覚を身に感じた。
怨霊を滅多斬りにした後、沖田はふぅ…と一息ついて、

「もう、大丈夫ですからね。」

と背後にいる葵を振り返った。
葵は目を見開いて、怨霊達と沖田を見比べていた。

（何……今の？）

葵の心臓が今までにないほど高鳴っている。
そして、背後にソレの気配。
背筋が凍ったようで振り向けない。
どうやら沖田達は気づいていないらしい。
心配げに葵を見ているだけだ。
「っ」
再び聞こえた微かな音。
胸を締め付けるような深い哀しみにまみれた声。
ドクンッと血が騒ぎ、己の身体がまだ見ぬ大きな力に導かれる。
急に隊士の持っていた刀を素早く奪い、葵が本能的に足を踏み出した。
（後ろにもっ……！）
沖田も慌てて剣を振りかざすより早く、葵は怨霊達に鮮やかな剣裁きを喰らわせる。
やがて、淡い光となりて消えていく。
荒い息を整えながら、葵は月明かりの下に佇んでいた。
『…ありがとう』
葵だけに聞こえた確かに囁く声。
葵は彼らの光を見送ってから、ふっと力が抜けたようにその場に倒れた。

「七瀬さんっ！」

沖田は葵を抱き止め、持っていた刀を元の隊士に返した。

夢を見た。
それは見覚えのある夢だった。
葵がうっすらと目を開くと、そこは真っ白な空間だった。
何もない、ただの白い世界に私は一人、存在していた。
しかし不思議と恐怖は感じられない。

「（ど、こ……？）」

感じるのは体を襲う妙な浮遊感と、暖かい空気だった。
ふんわり、とした優しい気持ちが心の底から湧き上がた。
思わず笑みが溢れる。

そしてまた私は目を閉じる。
突然、襲ってきた眠気が葵を心地よい夢に誘うのだ。
私は重たくなった瞼をゆっくりと下ろしていく。
完全に力が抜けて、ふと意識を沈みかけたがあまりの眩しい光が周りを覆い尽くして目を覚ました。

「んっ…」
「……起きました？」

目が覚めると、見知った顔がそこにはあった。
葵は、ただ呆然とその顔を見つめていた。

「あの―…七瀬さん？寝ぼけてます？」
「あ、…いえ。ごめんなさい。」

葵は、畳の上に敷かれた布団で寝かされていた。
起き上がって、沖田と同じ体制で視線を合わせる。
周りを見回すと、その隣に見知らぬ顔があった。

「だ、れですか…？」
「てめぇ、何者だ。あれを知ってるのか」

――あれ、とは？

「斬っただろ、覚えてるだろ？」

――斬った？

睨みつけてくるような視線に、葵は少したじろぎながら記憶を探る。

「…――」

思い出した。

あの時、自分の体がまるで、誰かに操られたみたいに動いたのだ。
刀を握って、振りかざす。
あの動作は自分では意識してなかった。
まるでもう一人の別の意識が、あるみたいにさえ思えたのだから。

「…土方さん、物事には順序ってものがあるのを知ってます？彼女、困ってますよ。」

沖田が見かねたのか葵の顔を見て言った。
溜め息をつきながら、土方と呼ばれた人物を見つめている。
しかし土方はそのまま話を進める。

「悪いが、あんたにはしばらくここにいてもらうぜ。謎が多すぎるからな。」
「あの、人の話聞いてます？」
「…それにしても変な服装だな、おい総司。お前なんでこいつをここに連れてきたんだ」
「決まってるじゃないですか、ただの好奇心ですよ」
「お前のそういう癖直せよ」
「それは無理ってものです」

話が噛み合ってないのか噛み合っているのか。２人を目の前に葵はただ話の成り行きを見つめていた。この服装といい、刀といい、珍しいものばかりだ。

「何か問題はあるか？」
「な、ないです…」
「ならいい。」

それに追加するように注意点をいくつか言ってからまた彼は睨むように、確認をした。

「…あの、…あれってなんですか…？」
「…それについては芹沢さんが話してくれるだろうよ」

彼は話したくないように、その話題を途切れさせた。
その後、２人は用事があるとかで部屋を去っていってしまった。ただ一人部屋に残された葵はまた寝転んで天井を見つめる。

第四話

『バカだな、だから寝てろって言ったのに。』

呆れた口調で透が私を見ている。

『ふふっ…透はこれでもかなり心配してるんだよ。高等部の俺のクラスまでわざわざ駆け込んできたりして…びっくりしたよ。』

遼が透の頭を撫でながら、くすりと笑う。

『兄貴、煩い。』

遼の手を振り払い、不機嫌そうに眉を潜める。

私は今日の朝、微熱があったにも関わらず…無理をして学校に行ったのだ。

今日は土曜日だったから午前授業だったし、久しぶりに三人で出掛ける約束もしていたから。

とはいえ、結局今はこういう有り様で、出掛けるのはまた後日ということになった。

幼なじみの二人は、それぞれ大学受験と高校受験で忙しい。透の場合はエスカレーター式なのに、出席日数がギリギリなことと今までサボっていた勉強で色々と大変らしい。

透も本気になれば相当できるのに、と私は思う。些細な出来事でも機転の回る透は要領もよく、勉強に当てればそれなりの成績など楽勝なのだ。

遼曰くサボっていた時間が長すぎた、らしいが。

『二人とも風邪うつっちゃうから、もう帰って。』
『今日はいないんだろ？おばさん達。病人放って帰れるかよ。』
『どうせ隣だしね。僕はともかく透は風邪引かないから。ほら、なんとかは風邪を引かないって言うでしょ？』
『――…兄貴。』
『何かな？透。』

遼の悪魔の笑みが透に向けられた。さすがの透も何も言わずにため息1つ。

『――…まぁ、ずっと側にいてやるから…今は寝てろ。』
『そうだよ。安心して、おやすみ。』

そう言って、二人が私の手を優しく握ってくれた。
暖かくて、安心できて、とても心地が良い。

《ずっと……側にいるから。》

視界に映るのは、見知らぬ天井。

（あぁ、そうだ。）

タイムスリップしたんだ、と改めて思う。
――…懐かしい夢だった。

あれは葵が高1の時。
あの幼なじみの二人はどこにいるのだろう。
そんなことを考えていると、すっと襖が開いた。

沖田達ではなく、また見知らぬ人だった。

「目が覚めましたか？粥をお持ちいたしました。――…どうかしましたか？」

「え？」

彼は静かに葵の頬を伝う雫を指ですくった。

泣いていたのだと、初めて気付いた。

「申し遅れました。私は、立川主税と申します。」

「七瀬葵です。」

「何かあれば、遠慮なく言ってくださいね。沖田さん達から貴女のお世話を仰せつかっていますから。」

立川は葵に微笑んだ。葵もホッとして、立川を見る。

「いえ…ちょっと懐かしい夢を見て泣いちゃっただけです。心配かけてすみません。」

「そうですか。何もないのであれば構いませんよ。」

立川はたいして気にもとめずに、葵を見て安心したように言った。

「あぁ、先ずは粥をどうぞ。ずっと寝込んでおられましたからね。」

立川が粥を差し出した。葵も体をおこして、それを受け取る。

すると、スパーンと鋭い音をたてて襖が開いた。

葵は驚いて襖を見やる。

「芹沢さんっ！」

立川は少々不機嫌そうに突然入ってきた芹沢に威嚇の視線を向けた。
「悪いなぁ、立川。」
悪いとは微塵も思っていないような声で芹沢は笑って言うと、視線を立川から葵に反らした。
ふと、目があって葵は思わず身震いした。
（…この人、なんか恐い。）
「彼女は病人ですよ？過ぎた行動は、慎んでいただきたい。」
「あいつらをぶった斬るぐらいのヤツだ。もう大丈夫だろ？」
（あいつら？）
沖田達も言っていた彼ら達のことだろうか。
「しかし、女には勿体無いよなぁ。最初、話聞いた時は女だとはまるで信じられなかったぜ。」
芹沢は愉しげに葵を見つめる。なんとなくムカッと来た葵も芹沢をにらみ返した。
「良い瞳だな。気に入った。
――…お前、男になれ。」
「は？」
芹沢は扇をかざして、葵を指した。立川も芹沢の言葉に唖然として、その場で固まっている。
今のはどういう意味なのだろうとあれこれ考える葵だが、答えは出

てこない。

「だから、今日からここにいろって言ってんだよ。」

「芹沢さん…しかし。」

「立川ぁ、お前は黙ってろ。」

鋭い視線で射抜き、立川を黙らせた芹沢は葵の頭をぽん、と叩いた。大きくて、暖かくて、優しい手だった。

「期待してるぜ、七瀬。詳しい話は、食事が終わってからだ。」

にやりと笑ってから、芹沢は出ていった。これから彼も食事に行くのだろう、襖の向こう側から声がした。

芹沢が居なくなってから暫くして、粥を食べる葵の隣で立川は口を開いた。

「すみません…。」

「いえ、立川さんが悪い訳じゃないですし。」

肩を落とした立川に、葵は慌てて言った。

「芹沢さんも悪い方ではないんですけど、ちょっと…。」

立川は苦笑いを浮かべながらそう言った。

「なんとなくわかりますよ。」

立川さんも苦労してるんだなぁと、葵は感じながら言葉を返した。

粥はちょっと冷めていたけれど、美味しかった。

それはきっと一人じゃなかったからかもしれない。

＊＊＊

「それでは、行きましょうか」

葵はそう言った立川さんの後ろを歩く。
部屋を出るとそこは、いつもと変わらない空があって。
今はなんだかあの日々が夢の様にさえ思える。

「（寒い…）」

朝とは言ってもまだ肌寒い空気が辺りを支配して、静寂を保っていた。
しん、と静まっている空気に二人分の廊下を歩く音が混じる
こんなに静かな朝は、久しぶりだった。
そのままたいした会話もなく、ただその後ろについていく葵。

「立川です。連れてきました」
「入れ」

襖が開くとそこには何人かの影があった。見知った顔もあるが知らない人物も何人か座ってこちらを見つめている。

新撰組。未来では名知れた幕末の組織。
日本史を勉強している時に何度か見かけたのを覚えている。
刀の時代を駆け抜けた、武士達。

どれほど凛々しくて、
どれほど美しかったか。

「まぁ座れ」

奥からの声主は、先ほどの声だった。
着物を少し崩しながら着ている彼は口元に笑みを浮かべながらこっちを眺める。
芹沢、という名だったはず。
彼は片手には扇子を持ち、楽しんでいるようにさえ思えた。
葵は正座をして、じっと前を見据えた。

「…七瀬葵と申します」
「そう固くなるな、話はしただろ？」
「はい」
「今日からお前は男になってもらう。」
「…はい」
「それに…疑問があるんだよ、何故あいつらはお前を狙っているんだろうなぁ？」
「え？」
「お前が現れてから、この屯所に入り込もうとする奴らが増えたんだが。…お前、何か知ってるか？」
芹沢の声音が少し厳しくなる。

持っていた扇子を音をたてながら閉じる動作を何回か繰り返しては葵の顔をじっと見つめている。

「それに…お前は何者だ。どこから来た」
「…その件に関しては僕から話させていただきます、宜しいですか？」
「あぁ」

山南、と呼ばれた人物が口を開いた。
眼鏡をかけ直しながら彼は慎重に言い放った。

「あなたは…鎮魂の使者ではありませんか？」
「た、たましずめ…？」
「あまり書物には記されていませんが、それはただ抹消されたのかもしれません。正直、夢物語だと思っていましたが、沖田君の話を聞く限り他の可能性は考えられません」

古来より伝わる使者。
喰鬼とは相反する立場であり、世界の均衡が乱れたとき訪れるという。
今まで数百年毎に現れ、そのたびに世界を救ってきた。
彼は別世界から召喚されることが多く、名の通り魂を鎮めることができる。
只、怨霊の苦しみや憎しみをその身に感じることとなる為…精神的な苦痛を伴うとされる。
本来の役目が終わると自らの世界へ帰るらしいが、詳しい記述はあまり残っていない。

芹沢は山南の言葉を聞いてからパチンと鉄扇を閉じ、葵をまじまじと見た。

「で、どうなんだ？」

芹沢がずいと葵に言い寄ってくる。葵は困惑しながら目を伏せた。鎮魂の使者など、全く身に覚えがない話だったからだ。しかし今更、しらばっくれても仕方ないだろう。ここは正直に話した方が良いと覚悟を決める。

「私…わかりません」

空気がピリッとなって葵は思わず緊張のあまり、視線を反らせずにいた。

「やはり、そうなのですね。貴女は使者ですよ」

山南は何か納得したように葵を見て微笑んだ。

「すみません…ちょっと引っ掻けてみました」

「え…？」

「彼らは、別世界から召喚される為、自分が使者である事実を知りません。何より、貴女のその姿が文献に残っている資料と似ているものですから…確信はありましたしね」

要は最初から疑っていたわけではなかったらしい。一気に緊張が解けて、葵はホッとした。

（…ん？『姿』？）

不意にハッとして葵は、自分の姿を見返した。

――――…制服だった。

「まずは服着替えねぇとな。お梅に後で頼むか」

芹沢は気楽にそう言っている。誰も反論はしなかった。先ほどまでのピリピリした空気は微塵も感じられない。

「もう一つ…言っとくが、お前が女だって知ってんのは此処に居る面子だけだ。総司達と一緒に居た奴等は適当にあしらっとけ。女が刀振り回すなんて普通信じられねぇし、第一会ったのが夜だったしな。あいつらには、俺からお前は『男』だったって既に言ってある。名前もそんな女っぽくないし、そのまま生活してもらってかまわない」

葵はただ戸惑いながら、はぁと覇気のない返事を返した。

（…此処にいる面子。）

葵は部屋を見回した。芹沢と山南と沖田と立川と…名前がわからない人が数人。意外に知っている人間は多い。

（…上手くやっていけるかな）。

笑顔を浮かべながら葵に会釈して部屋を出ていった。

「良し…じゃあそう言う事だ」

芹沢は奥に座っていた青年に一言かけた。

「えぇ、父には私から伝えておきましょう」

青年はそう言うと、人の良さそうな笑顔を浮かべながら葵に会釈して部屋を出ていった。

第五話

「…兄貴、始末を僕に任せるな」
「はいはい。わかったからそんなに睨まない。笑うと少しはその不細工な顔もマシになるんだけどな」
「五月蝿い」

彼らは、暗い洞窟の中にいた。まだ太陽が空に出ているというのに眩しいくらいの光はここまでは届かない。
冷たい風が頬を刺すように吹いて体温を少しずつ奪っていく。壁際に小さく灯された蝋燭の火が明かるく照らした。

「遼兄さまーっ！」
「透兄さまーっ！」

大きな虎のような獣の背に乗って、二人の少女がこちらに向かってきていた。

「きたよ、双子…」
「やぁ、久しぶりだね。元気だったかい？」

遠くから聞こえてくる明るい声に透はうんざりしながら彼女たちを見つめた。

遼はというと、笑みを浮かべて手まで振っている。
彼女達は勢いよく二人に抱きついた。

「会いたかったよー！」
「…痛、後ろから抱きつくな」
「久しぶりー！」
「ふふっ…なんだい？そんなに寂しかったのかい？」

「寂しかったー！」

二人、声を揃えて叫んだ。
束ねている髪がさらさらと動くごとに揺れて、可愛らしい頬が紅く染まる。
淡い赤色の髪に白く透き通るような肌。

「人間って嫌ね。」
「でも二人は好き！」
「ありがとう。ところで…ちゃんと仕事はやったんだよね？」
「あぁ、そういえば…」
「もちろん！」
「やったよ！」

遼は二人の頭をよしよし、となでるように褒めた。

「鎮魂の使者がきたか…」

＊＊＊

『男になれ』と言われて、数日たった。
八木家の中でも葵の素性を知るのは、長男の秀二郎ぐらいだ。
彼は何かと葵のことを気にかけてくれたし、沖田や芹沢達も悪い人では決してなかったから生活はそれなりに充実していた。
ただ――…剣術の稽古には流石に葵もまいっていた。

「まさか、素人だったとは…いえ申し訳ありません」
「此方こそすみません、秀二郎さん」
「大丈夫ですよ。貴女には素質がありますから」
「沖田さんまで…」

葵はつい先ほど、稽古をつけてもらったばかりなのだが、あの夜の動きとは似ても似つかぬ太刀裁きだった為に、稽古をつけてくれた沖田達に痣をつけてしまったのだ。

あの時のように何故動けないのか、いや――どうしてあの夜はあんな斬り方を出来たのか、それは葵自身にもわからなかった。
見えない力が山南のいう鎮魂の使者の力ならば、きっとそれは葵の

意思とは必ずしも一致して働くものでは無いことは確実だ。
知らない力に支配されてしまう、そんな恐怖が葵の心に巣食う。
思わず手が震えた。
「――…沖田さん、七瀬さんの刀を選びに行っては如何ですか？」
「刀？」
「ええ、刀を持つとやはり気合いが入りますしね」
「でも…私まだそんな」
「行きましょうか？」
沖田はにっこりと微笑んで、葵の手を無理矢理引っ張った。
「貴方にもそろそろ覚悟を決めて頂かなければ…」
真っ直ぐに葵を見る沖田の瞳は真剣そのもので、葵は息を呑んだ。
「本当に私に刀を買うんですか？」
「はい、芹沢さんにも許可貰いましたし。楽しみにしているみたいですからね、貴方の太刀裁き」
沖田の言葉に葵は押し黙った。
「気にしないで良いですよ。あくまで芹沢さんは、という話ですから」
黙った葵を気遣って、涼しげな笑顔を向けた。
そして手をぽんと合わせて、イタズラっぽく葵に笑いかけながら言ったのだ。

「ちょっと寄り道しませんか？」
「寄り道？」
「はい、寄り道です」

沖田の笑顔に戸惑っている葵を連れて、二人がついた場所は壬生寺だった。
壬生寺には何人かの子供達が遊んでいて、二人に気づくと子供達は嬉しげに手を降ってきた。

「知り合いなんですか？」
「時々、一緒に遊んでいるんですよ」

子供っぽくくすりと笑う沖田は、行きましょう、と葵の手を引いた。
子供達に駆け寄ると沖田の周りには、寺にいた子供達が群がった。

どうやら人気者らしい。

「今日は一緒に遊んでくれるの？」
「何して遊ぶの？」

きゃあきゃあ騒ぐ子供達を見ていると葵もなんだか和んだ。

「ねぇ、この人は？」

ふと一人の男の子が葵を指差した。

「私は七瀬葵だよ。宜しくね」

ちょっと緊張しながらも微笑みを浮かべていうと、

「宜しく！」
「葵兄ちゃんって呼んでも良い？」
子供達は快く葵を受け入れてくれた。
それから子供達と戯れる中で、懐かしい感覚が葵の胸に沸き上がる。
確か、幼なじみの二人とも良くこうやってふざけて遊んでいた。
青空の下で追いかけあって、笑いあって……そんな日々が遠い昔に感じられた。
「そうだ、葵さん」
「え？」
にぎやかな子供達の声に混ざって沖田の声が私の耳に入る。
天気は快晴、太陽の光が地上に降り注いでいた。

「もう一つ言っときたいことがあったんですよー…刀を持つんですよね、葵さん」
はい、と心の中で呟きながら次の言葉を待つ。
子供たちを眺めながら、座り込んでいる沖田の隣に並ぶように葵は座った。
「さっきあなたに覚悟をして欲しいと言いましたよね？」
「あっはい」
「それに追加させていただきます」
沖田は葵の瞳を見つめて、言い放った。

「葵さんは、大切な何かを本気で守れる覚悟をしてください」
「…どういうことですか？」
「そのうち、わかりますから」

覚悟を決めなければと思いながらも自分は本当にできるのだろうかとの不安が湧き上がる。
刀を選ぶという事を話した時も覚悟をしないといけないと沖田に言われた。
立ち上がり砂を払う沖田は、まだ自分とそんなに年齢もわからないはずなのにどこか遠いように感じた。

「覚悟、か……」

そんなもの、考えてもいなかった。
今まで生きてきた中で、何かを斬る覚悟など。
ましてや刀を持つ覚悟など。
――必要なかったのだから。
先を歩く沖田の背中を眺めて、追いかける。
「でも…」
本当にそんなことができるのだろうか。
やっぱり自分には資格がない気がしてならないんだ。

「ここですよ」

彼の後ろを歩いていくとそこには、小さな鍛冶屋があった。
カツン、カツンと金属を叩く音が外まで響く。

「すいませーん！」

沖田が颯爽と中に入ってしまったので、ただ呆然と入り口に立ちすくむ葵。
恐る恐る中へと進むと、そこは武器の宝庫だった。

「おじさん、この人の刀を買いにきたんです」
「ほぉ…これまた若い」
「は、はじめまして」

葵はぺこりとお辞儀をして相手の顔を見つめた。
おじさんは細い眼をいっそう細くしながら様子を窺っている。

「それで刀を選びにきたと…？」
「はい」
「刀は持ち主を選ぶという、じっくり見とくれ。奥にも部屋がある。案内しよう」

案内されたのは少し薄暗い部屋だった。

様々な刀とにらめっこしながら数時間。
沖田さんはおじさんと話していてこの場所には私しかいなかったが
後ろから見知らぬ声が聞こえた。

「…やっと来たか」
「…え？」
「…この刀が、主を選んでいるぞ」

その青年の口元が弧を描いた。青年は布を深く被っていて顔がよく
見えない。
差し出されたその刀を握ると、なんだか不思議な気分へ落ちていく。

「あなたは……――」

ふと、顔を上げて青年を見つめた。
思い出すのは、あの白い空間。

何故だろう。
青年の姿は、どこか。
———懐かしいようで。
知っているような気がした。

＊＊＊

この世界の均衡が乱れ、彼女を守ってやれない。

「——…申し訳ない」

刀に見入っていた葵の目の前の青年は、か細くそう言った。

「え？」

ふとハッとして顔をあげても、彼の姿は何処にもない。足音すらしなかった。だが、不思議と怖くはなかった。

「あの！」

自分に刀を授けたあの青年、何故だかもっと話したいと思った。初めてあったはずなのに、何処か青年を知っていたような気がした。だが、葵が発した声に対して返事をしたのは青年ではなく沖田だっ

た。

「どうかしましたか？」

刀が並んだ薄暗い部屋にひょこっと頭だけを出して尋ねた沖田に全く、葵は反応しない。

刀を力なく持った葵は心ここにあらずと言ったような考えこんだような表情で部屋の真ん中にずっと立ち尽くしている。

何度呼びかけても返事がないので、しょうがなくおじさんとの会話を打ち切った沖田が薄暗い部屋に足を一歩踏み込んだ。

瞬間、結界のようなものを感じ、身体にビリッとした痛みに似た感覚が走る。思わず足を見つめ、

（今のは…？）

沖田がそう考えこんだ時、後ろでおじさんが危ないっと叫んだ。何事かとふと視線を葵に戻せば、空を切る鋭い音が耳を裂き、刀の切っ先が喉元にあった。

ただ、圧倒されるしかなかった。久しぶりに身体中に血が沸き立つ。目の前の葵は、初めて沖田が会ったあの龍神の神子である葵だった。手合わせしてみたいのは山々だったが、今はその時ではないだろう。沖田は気を沈めつつ、葵にいつも通りの微笑みを向ける。

「葵さん」

「――――…っ…あれ？沖田さん？」

瞳の色が急に鋭さを失い、あどけない少女の顔に戻った。沖田はほっと安堵の息を吐き、つつと刀を指で押し戻した。

「ぁぁ！ご、ごめんなさい！なんで私沖田さんに刀なんて向けて！」
パニックに陥った葵があわあわ刀を鞘にしまおうとしていたが、震えた手では鞘には収まってくれない。見かねた沖田が葵の手から刀を取り、するりと手慣れた手つきで刀を鞘におさめた。

「この刀、勘定お願いします」
沖田は葵に確認をとることもなく、店の男に刀を手渡して支払いの準備をしていた。

「お、沖田さん？」
戸惑いながら遠慮がちに沖田を見上げると、きょとんとした瞳と目があった。

「どうかしましたか？」
「どうかしましたかって…だって……」

つい先ほどまで自分でも理解不能な行動を起こしていたというのに、沖田は全く気にしていないようで――まるで先ほどの一連の出来事はなかったかのように振る舞っている。
自分が自分ではなくなるあの感覚を、葵は心なしか恐れていた。だから、それについて言及してこない沖田には内心感謝していたが、それにしても気にしなさすぎだとも感じていた。
彼が天才と言われるゆえんはこう言った肝が据わったような、何事にも動揺せずに飄々と笑っている彼の人となりのせいもあるのだろう。
そんなことを考えていた葵は、ふと視線を反らし、刀を見やった。

そのまま顔をあげると、尊敬の意を秘めた輝きを放つ顔をしたおじさんと目があった。

「お目が高い。それにさっきの太刀裁きと言い…久しぶりに若いもんに感動したよ。この刀、大事に使ってくれ」

「ふふ…お勘定、ただにしてもらいました」

「ええ？」

「ありがとうございました。では、行きましょう」

「え、あ、沖田さん？」

ぐいぐい沖田に腕を引っ張られ、満面の笑みでおじさんに見送られ、またいつでも来てくれと手を大きく振られた。曖昧に微笑み、手を振り返したあとに沖田は急に足を止めた。

あまりに突然止まった為に、手を引かれて沖田の後ろを歩いていた葵は背中に激突しかかった。

「――…また、ですか」

「あ、え？」

刀に手をかける沖田の隣にたち、葵　も感じた。

汗にまみれた手が、先ほど自分のものとなった刀の柄にかかる。

＊＊＊

――私は、なんのために刀を持ったんだ。

自分自身に問いかける。
だが答えは返ってこない。

言いようのない苛立ちが、押し寄せた。
どうして、守れないんだ、と。

葵は目の前にいる喰鬼をキッ、と睨みつけた。
相手も唸って、こちらを威嚇している。
刀を握る手が汗で滲む。
背中にすっと冷たい汗が流れた。悪寒がする。
深呼吸をしてゆっくりと刀を抜いた。
白銀の光が、現れる。
刀を抜く、ということは私は人を斬れることが出来るのだ。
刀の切っ先を喰鬼へと向ける。しかしただ、向けているだけ。その次の段階へとは踏み出せない。斬らなくては、とわかっていても、体が反応してくれないのだ。
この状況で、私のすべきことはなんだ。
そう迷っている時に、喰鬼が動いた。

「ッ！！」

喰鬼が葵の体を軽々とその片手で吹き飛ばした。
大きな音と共に、その衝撃で土が舞う。
腹部に激しい痛みがはしった。呼吸が途切れ途切れになり、だんだんと小さくなっていく。

胃から何かかが喉へと伝う。
それは乾いた唇からごぼっと音をたてて赤い血が吐き出された。
だんだんと、体が重くなっていく。
頭を強く打ったせいか、視界がぐらり、と揺らぐ。
吐き出した赤い血が、自分の服にへとへばり付く。

吐き出された血が乾いて喉が痛い。

「葵さん！！」

沖田が私を呼ぶ声がする。
視界が霞むが、その中に沖田の姿を見つけた。

「…おき、たさん…」

すがるように手を伸ばす。
しかしその手は何も掴めない。彼は向かってくる喰鬼を、次々と倒していく。
また別の怨霊が沖田へと迫っているのが視界に映る。

私に気をとられて、彼はその存在に気がつかない。
――だめだ。

後ろから近づいてくるそれが沖田を狙って牙を向けた。
その時、葵の上にさっきの喰鬼がのしかかる。
うっ、と小さな呻き声が彼女の口から漏れた。
肩が軋んで、骨折しそうだ。
押し付けられて、身動きがとれない。

――どいて、どいてよ。

知らせないと、いけないんだ。
その喰鬼と瞳がぶつかる。
声に出して言おうとしても、言葉が上手く紡げない。

「グルァァアアア」

「…離、し…て」

早くいかないと。
何してるんだ、私は。
離せ、離せ。

何のための刀だ。
何のためにあるんだ。

――守りたい。

「ァアアァ゛！」

「離せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

それは、あまりにも突然に。
私の思考が、弾けた。

「…土方はんには知らせておいたわ。にしても…このお嬢ちゃん、やるなぁ」

ため息をつく、山崎。
監察方である彼は、二人をつけていたのだ。
喰鬼が来ていたとき、彼は屯所に知らせに戻りまたその場所へとたどり着いた。
その時の光景は、彼曰わくすごい、らしい。
でしょうね、と沖田もため息をつく。

「僕も驚きました」
「あんな暴走されたら困るわ。よく止めたな」
「…仕事が増えるのは嫌なんですよ」

すやすやと自分の背中で眠る彼女にまたため息をつく。
彼女をおぶって屯所へと向かう。

「…今回のあの喰鬼、以前にも対峙したことがあるんですよ」
「へぇ？」
「でも今回はやけに力を増していました、いや。むしろ進化していたような」
「進化…なぁ…」

おかしい。彼女がきてから違和感を感じるようになった。
背中に伝わる重みと温かさに、まだ彼女が少女だと感じるが、とてつもない恐怖感もある。
ただ、まだ些細な変化だとたいして気にもとめずに歩く。

にぎやかだった街並みももう太陽が傾きかけていた。

第六話

人を斬ることにはもう馴れた…いや、最初こそ人を斬ることに快感を覚えていたがそれすら感じないほどに今は冷めている。
そして、文久二年、入京した。
月と闇夜に煌めく刀のなんと美しいことか。
ただ残念なのはそれにふさわしい血が見つからない。
誰を斬っても、何度斬っても、刀に映える血というものが見つからない。

「おい、河上」
「んぁ？」
「んぁ？…じゃねぇよ」

ため息混じりの中村と今しがた斬ったばかりの人間だったそれを見つめた。

（つまんないなぁ…）

依頼されたぐらいだから少しは腕のたつ人間かと見込んできていたが、どうやらそうではなかったらしい。

あっという間に仕事は片付いた。
中村も河上と同じように物足りなさを感じているのか、空を仰いでまたため息をついている。

「中村君こそため息なんかついちゃってさ～。物足りないなら僕が手合わせしてあげよっか？」
「は？」

半分本気、半分冗談のつもりで言ってみたものの、中村はポカンと口を開けて河上を見、眉を潜めた。

「やめとく」
「なんで？どうして？負けるのが怖いの？」
「違ぇ。楽しみは最後にとっとくもんだろ」
「…楽しみは最初に奪うものでしょ？僕と君は正反対だね」

河上は興味津々に中村を舐めるように見る。
その視線に中村はまたしても眉を潜めた。

「なんだよ」
「頭はそこまで馬鹿じゃないみたいだ」
「……やっぱ斬る」
「落ち着いてよ、中村君。ほら訪問客だ」

河上は半ギレ状態の中村に、意味ありげにニヤリと笑いかける。
中村も河上の獲物を見つけたような独特の視線に射ぬかれて、柄にかけていた手の力を別を強めた。
雲の切れ間から月明かりが差し込み、やがて二人の瞳に1人の男の姿が映る。

「金髪…？」
「珍しい、誰だろうね？まさか今噂の喰鬼ってやつ？」
「でもあいつ人間だろ」
「そんなのどうでもいい、僕はただ自分が楽しめればいんだよね、…それに今はどうも最近は斬っても面白くないんだ。君、ちょうどいい玩具になりそうだ」
「俺も参加すんぞ」

顔を見合わせてニヤリと縦に頷き、獲物を睨む。
獲物である金髪の青年は、月明かり金髪を煌めかせながら一歩一歩二人へ近づいてくる。
やがて、青年は足を止めた。
ごくりと唾を飲み込む。
何故だか身体中の血がたぎっている。
二人ともこの感覚は久しぶりに感じたもので、心踊る逸る気持ちを抑えつつ、はばきを押し出した刀を一気に引き抜いて斬りかかった。
最初に斬りかかったのは河上だった。
奇態な独特の刀法で、今まで一度も仕損じたことのない河上……しかし、青年はいとも簡単にその刀を交わして見せた。

「なかなか面白い刀だね？」

青年は余裕を感じさせる笑みを浮かべている。

「だらしねぇな、河上！」

続いて中村が斬りかかったが、やはり青年はものともせずに軽々と交わして見せる。

「ふふっ…威勢の良いお侍さん達だね。嫌いじゃないよ？こういう挨拶の仕方は。でも、もうおしまい」

ふっと青年が微笑み、口を閉ざした瞬間、辺りが真っ暗になった。

空を見れば、黒く淀んだ雲が頭上一面を覆い、月を隠している。

不気味な程に暗い静寂の中、青年は再び口を開く。

「僕は、依頼をしに来たんだ」

「依頼？」

中村が首を傾げる。

「鎮魂の使者って知ってるかな？」

「さぁ、知らねぇな。河上は？」

「原道館に居た時にちょっとね～。中村君と違って、僕は学問修めてるし」

「――…うぜぇ」

一触即発な二人を見て、面倒くさそうに髪をかきあげた青年は、こう言った。

「まぁ良いや。その話は追々するとして…君達、僕に雇われてみない？大丈夫。退屈はさせないよ」

その言葉に偽りは感じられなかった。

何より、先ほど刀を交わされたことが決定打となった。

「ねぇ、楽しませてくれるの？」

一応、依頼人に対し口調を改めた中村に、青年は人の良さそうな笑みを浮かべた。

「勿論。あぁ、自己紹介がまだだったね」

だんだんと雲が退いて、月明かりが差し込みはじめる。
夜風に金髪が揺らめく中、青年はその名を口にした。

「設楽　遼」

＊＊＊

文久三年八月十八日

壬生浪士に訪れた大きな画期である。
薩摩と会津が組んでの長州系激派追放。
御所の門を固めて長州系激派を入れない。
その時壬生浪士は会津藩の指示で門を固める要員として動員された。
激派公卿は参内を止められ、彼らが占めていた国事参政などの職は廃止された。
親征討幕の構想は八・一八政変で粉砕されたのだった。

「葵、なにしてる」
「あっ…芹沢さん、いえ。ただ空を見てただけです」
「そんなに楽しいか？」
「じゃあ一緒に見ましょう！」

葵は自分の隣を片手で叩いて、どうぞと言った。
縁側で二人で一緒に空を見上げる時間を平和だな、と思う。
太陽がこれでもか、というほどに地上に降り注いだ。
熱くなった風が、髪を揺らしてまた空へと帰る。
腰に差している刀を握りしめ、その存在を確かめた。
まだ、この刀で人は斬っていない。
この間の事件も留守番だった。

思い出すのは、あの感覚。
沖田が危ないと思った時、力が暴走した。
怖かった。
自分にあんな力があったなど、思いもしなかったのだから。
首を振って、考えることを止めた。
葵は話を変える様に、芹沢を見て言った。

「この間芹沢さん、先頭で凄かったらしいですね」
「あぁ」
「…芹沢さんは…色んな意味で凄いと思いますよ」

風が駆け抜ける。
大地を踏みしめるように、颯爽と吹いた。
「この壬生浪士組のこと、一番よくわかってると思います…」
葵の口から無意識に出た言葉。
どうしてだろう、心が締め付けられるように痛かった。
葵の視線が、自然と下へと落ちていく。
芹沢さんは体を張って、全てを背負ってきている。
そんな気がしたからだろうか。

「あーあ、私も見たかったです」
「人もろくに斬れない奴ぁは足手まといなんだよ」
「…はっきり言い過ぎじゃないですか？」
「人は斬ろうと思って斬るもんじゃねぇんだよ」
「じゃあどうすればいいんですか」
「さぁな、自分で考えろ」
それは謎かけのような言葉だった。
葵はふと、空を見上げた。
大きくて、晴れ晴れとしていて、綺麗だった。
視界が白色と、青色に染まる。
――それはとても、とても美しかった。

「いつか、壬生浪士組はすごくなりますよ！」
「当たり前だろ」

ぱちん、と手に持っていた鉄扇を叩く芹沢さんの姿。
それを見ると笑みがこぼれた。
改めて考えてみるとと私がここに居られるのは、芹沢さんのおかげなのだ。

「…感謝してます」

そっと呟く。
自然と緩む顔に、口元が弧を描いた。
――たとえ大和屋の焼打のような、蛮行があったとしても。

葵は思うのだ、

人が戦争する理由も、
人が誰かを傷付ける理由も、
人が自分の命を絶つ理由も、

全て誰かが、誰かを助ける理由になる気がしたから。
何かを犠牲にして、何かを救おうとしていて。

だからきっと芹沢さんは、何かを助けるために何かを犠牲にしている。

みんなは、わかってないんだ。
彼の本心を。

「芹沢さん」
「何だ」
「大好きですよ」

尊敬の愛。
それは、葵からの感情表現。

「……」
「あっ、照れてる」
「…照れてねぇ」
「赤くなってますよ？」
「気のせぇに決まってんだろ」

あなたを照らす太陽に。
あたしは――――なれなかった。

「お前は、鎮魂の使者なんだろ？…この世界を救うぐらいに強くなれ」
「はい！」
「大切な何かを守れるくらいまで、な」
「芹沢さんは…もう守れてますか…？」

大切な、何かを。
自分が強くなって、得られたもの。

「あぁ、守れている」

そう笑っていた芹沢の顔を、葵は、一生忘れることはできない。

雨がざぁざぁと五月蝿い。

その日、彼は女と共に寝込んでしまった。
その姿を見届けた土方の次に斬りに来たのは沖田と原田。

彼は必死に生きて、
何度も
何度も
天を掴もうとした。

逃げながら何度も斬られた彼の体は倒れた。

その体が倒れた時、
その目が閉じる時、

その耳からが音が消えた時、

彼はその心で何を、聴いたのだろうか。

事を聞いたのは、事件から数時間後だった。
部屋の前の廊下を隊士が噂をしながら歩いた。

心臓が、止まるかと思った。

心が痛い。
涙がぽろぽろと頬を流れる。
誰かに心臓を鷲掴みされたみたいだ。
呼吸がままならなくなり、体が前に倒れる。
やっとの事で、手でそれを止めたが、涙を止める術をしらない私は。

――自分を制御できない。

あの日一緒に空を見たのは誰？
いつものように鉄扇を手に持って笑ってくれたのは誰？

どうしても部屋に留まる事は出来なくて。
外へと足を踏み出した。

冷たい雨が葵の髪を、頬を、体を流れた。
葵の涙も一緒になって、地へと流れる。

雨で着物が体に引っ付くのを気にせずただ立ち尽くした。
冷たくなる体に、重くなっていく体。

「…ば…か」

芹沢さんの馬鹿。
大嫌いだ。

彼はきっと、
こうなることをわかっていた。

「……どうして」

どうして殺したんだ。
彼は真っ直ぐに、一番素直に生きたじゃないか。
悲鳴にも似た葵の心の嘆きが夜空に響いた。
涙が、溢れて。
どうしよう、止まらない。

五月蝿い雨の音が葵の声をかき消して、全てを無にする。

―――何も、聞こえない。
もしも自分がもっと強かったら、
この未来を変えられただろうか。
葵は空を見上げた。
厚い雲が空を覆って涙を、流していた。
「っ…」
たった数日前、彼と話して、生きていたのに。
今は、もういないのだ。
それがとても、寂しい。
心にぽっかりと穴が開いたような。
その気持ちは、言葉にできない。
「葵」
「土方、さん…」
そこにはいつもと変わらぬ顔があった。
雨にうたれる葵の姿を見て土方は、目を伏せる。
そして言った。

「…芹沢は道を外れたんだ」
「そうですか…道を外れたんですか、芹沢さんは」
「……」
「馬鹿…だなぁ」

また同じことを呟いて、土方に謝罪の言葉を言った後に自分の部屋へと戻る。
静かに去る葵の後ろ姿を見つめる土方は、
何を思ったのだろうか。

侵入者に襲われたと取り纏われた丁重な葬儀。
ゆっくりと、それは行われた。

心に残るのは虚しさと、切なさ。
葵は、静かにまた泣いた。
今よりずっと強くなって、自分の大切なものを守れるくらいになると誓う。
今は弱い自分が腹立たしい。
もっと強くなりたい。

誰にも負けないくらいに、強くなりたい。自分が鎮魂の使者だと言うのならば、私はその力を使って、この世界を救いたい。

約束、したから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0254t/

ゆめにしき

2011年10月9日02時04分発行